

用いた。

C. 結果

1) 検査件数とHIV抗体陽性者数の動向

1993年(平成5年)からの性別・検査数とHIV抗体陽性者数の推移を表1に示す。検査数は1994年に7147件と多く、その後3年間は6000

件前後であったが、1998年はテレビドラマの影響で7814件と大幅に増加し、1999年はさらに増加を続け過去最多の8318件となった。1999年の男性受検者数は5593人、内HIV抗体陽性者は44人(0.79%)でほぼ前年と同率で、HIV抗体陽性者の72.7%は男性同性間での感染であった。

表1 M医療検査機関における性別・検査数及びHIV抗体陽性数

年	男				女			合計		
	検査数	HIV 陽性			検査数	HIV 陽性数	%	検査数	HIV 陽性数	%
		数	%	同性間*(%)						
1993年(4ヶ月)	1675	4	0.24	3 (75.0)	803	2	0.25	2478	6	0.24
1994年	4975	12	0.24	9 (75.0)	2172	2	0.09	7147	14	0.20
1995年	4041	18	0.45	11 (61.1)	1659	0	0.00	5700	18	0.32
1996年	4517	27	0.60	23 (85.2)	1885	2	0.11	6402	29	0.45
1997年	4428	35	0.79	29 (82.9)	1706	5	0.29	6134	40	0.65
1998年	5108	40	0.78	31 (77.5)	2706	2	0.07	7814	42	0.53
1999年	5593	44	0.79	32 (72.7)	2725	5	0.18	8318	49	0.59
合計	30337	180	0.59	138 (76.7)	13656	18	0.13	43993	198	0.45

表2 M検査機関におけるMSM回答者の年齢階級別分布

年	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	不明	MSM回答数
1993	6	101	44	8	4	7	0	170
(%)	3.5	59.4	25.9	4.7	2.4	4.1	0.0	100
1994	13	173	81	26	6	3	0	302
(%)	4.3	57.3	26.8	8.6	2.0	1.0	0.0	100
1995	44	354	139	35	16	6	2	596
(%)	7.4	59.4	23.3	5.9	2.7	1.0	0.3	100
1996	33	373	173	58	16	7	4	664
(%)	5.0	56.2	26.1	8.7	2.4	1.1	0.6	100
1997	44	480	226	66	26	14	0	856
(%)	5.1	56.1	26.4	7.7	3.0	1.6	0.0	100
1998	110	581	275	55	23	12	2	1058
(%)	10.4	54.9	26.0	5.2	2.2	1.1	0.2	100
1999	40	504	278	63	22	8	1	916
(%)	4.4	55.0	30.3	6.9	2.4	0.9	0.1	100
合計	290	2566	1216	311	113	57	9	4562
(%)	6.4	56.2	26.7	6.8	2.5	1.2	0.2	100

*1993年は9-12月分、1994年は1-3月、9-11月分、1999年は1-10月分のみである

2) HIV陰性者のアンケート調査結果

(1998年11月~1999年10月)

受検者に対する質問票調査の回収率は91.6%で、MSMに相当する回答は1113名(MSM回答率15.2%)であった。MSMに関する集計結果の概要は以下のものであった。

- ① 年齢分布：10代4.4%、20代55.4%、30代29.9%、40代6.8%、50代2.2%、60代以上1.0%、不明0.3% (表2)。
- ② 住所：東京都69.6%、その他28.8%、不明1.5%。
- ③ 職業：勤務者57.0%、自営業4.6%、学生20.2%、アルバイト9.3%、その他7.7%、不明1.2%。

- ④ 検査回数：初回受検者 42.0%、2 回以上受検者 57.2%、不明 0.8% (表 3)。
- ⑤ M医療検査機関のH I V検査実施についての情報源：雑誌 (ゲイ雑誌からと思われる)、友人クチコミ (図 1、7)。
- ⑥ 受検動機となったH I V感染リスク行動：

88.5%が国内での行動 (図 2、8)。

- ⑦ 感染リスク行動から検査までの期間：90 日以内の者は約 20% (図 3、9)。
- ⑧ 受検動機を向上させるPR：早期発見のメリットや治療法の進歩など (図 5、11)。

表 3 M検査機関におけるMSM回答者の検査回数の分布

年	初回(%)	2回目(%)	3~5回目(%)	6回以上(%)	答えたくない(%)	MSM 回答数(%)
1993	97(57.1)	48(28.2)	25(14.7)	0(0.0)	0(0.0)	170(100)
1994	180(59.6)	73(24.2)	40(13.2)	6(2.0)	3(1.0)	302(100)
1995	332(55.7)	142(23.8)	107(18.0)	7(1.2)	8(1.3)	596(100)
1996	338(50.9)	157(23.6)	142(21.4)	9(1.4)	18(2.7)	664(100)
1997	403(47.1)	231(27.0)	189(22.1)	29(3.4)	4(0.5)	856(100)
1998	453(42.8)	290(27.4)	255(24.1)	49(4.6)	11(1.0)	1058(100)
1999	386(42.1)	239(26.1)	246(26.9)	39(4.3)	6(0.7)	916(100)
合計	2189(49.1)	1180(26.4)	1004(22.5)	139(3.1)	50(1.1)	4562(100)

* 1993年は9-12月分、1994年は1-3月、9-11月分、1999年は1-10月分のみである

図1 「この検査について何でお知りになりましたか？」

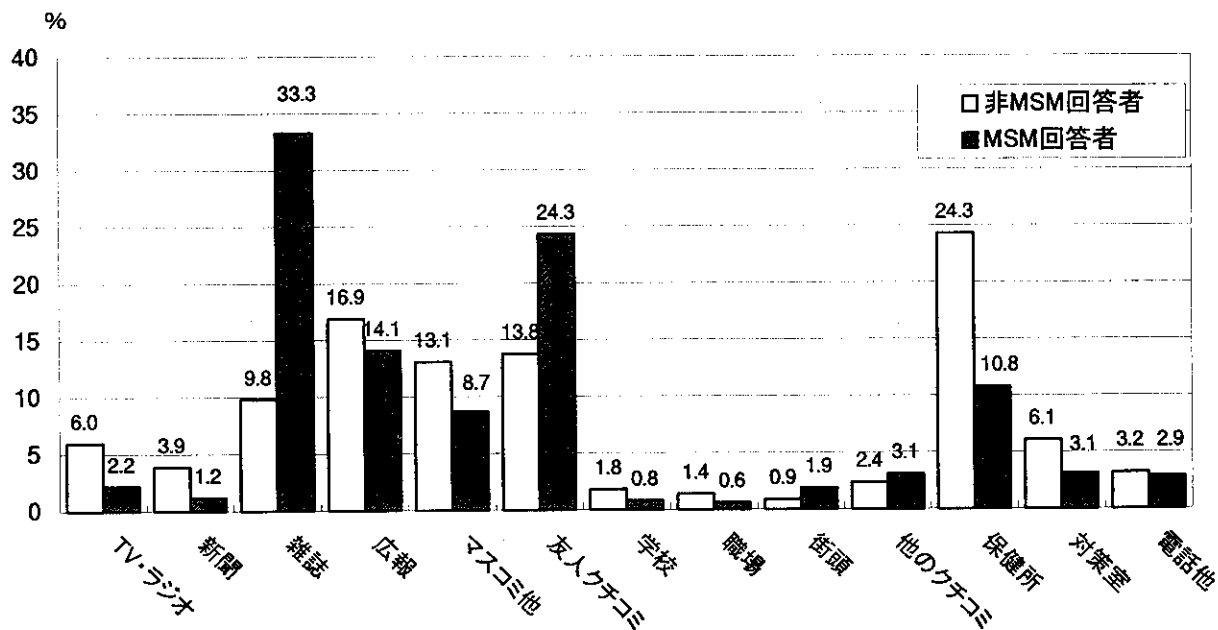


図2 「感染の機会や心配があったのは？」

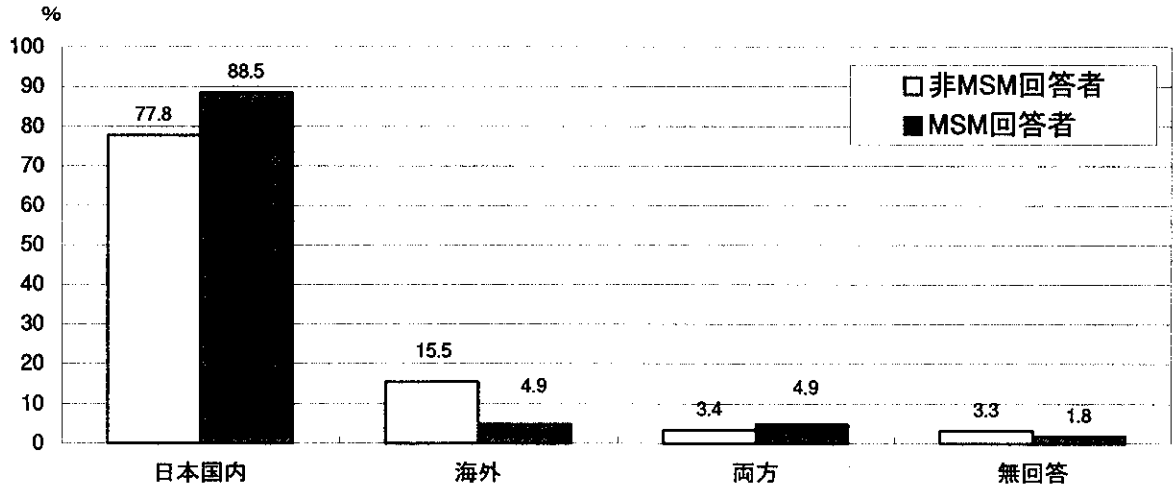


図3 「感染の機会や心配があつてからの期間は？」

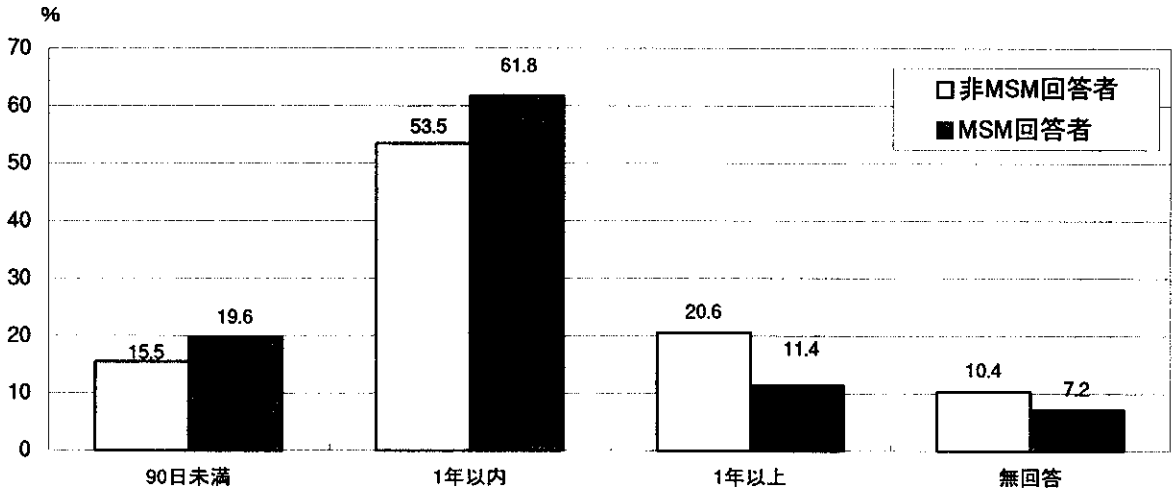


図4 「検査における動機・不安等について」

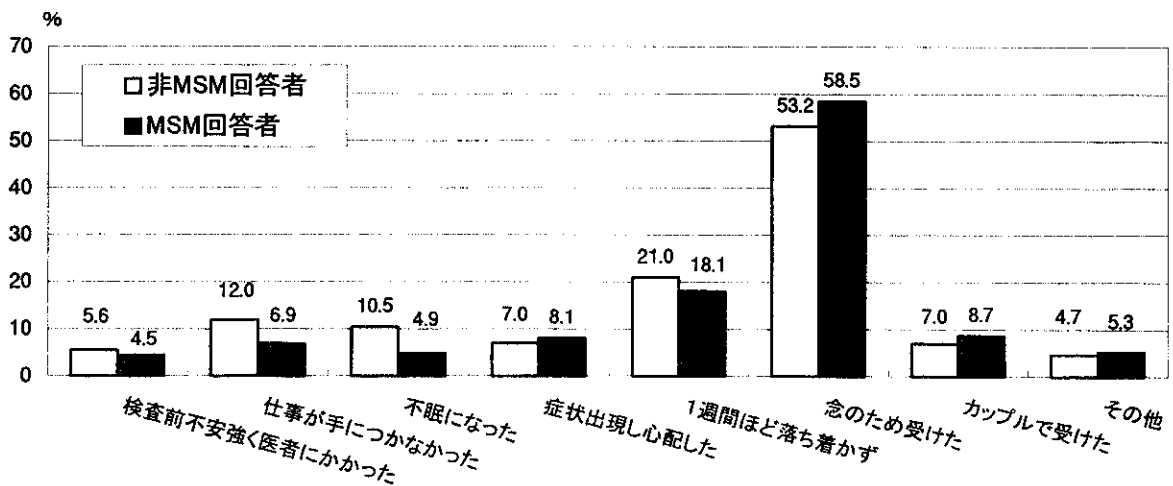


図5 「どの様なPRの内容が検査を受けようと思いますか？」

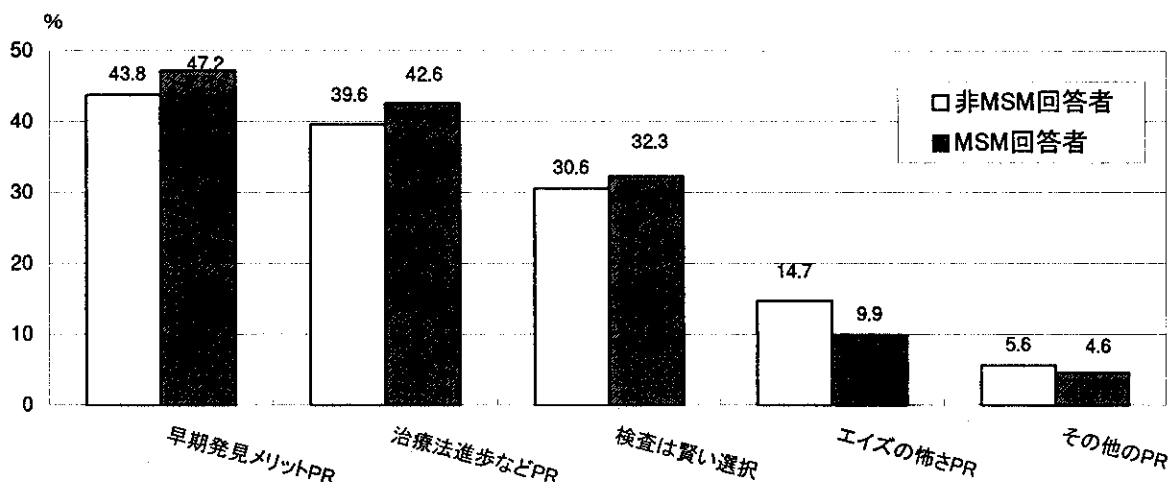
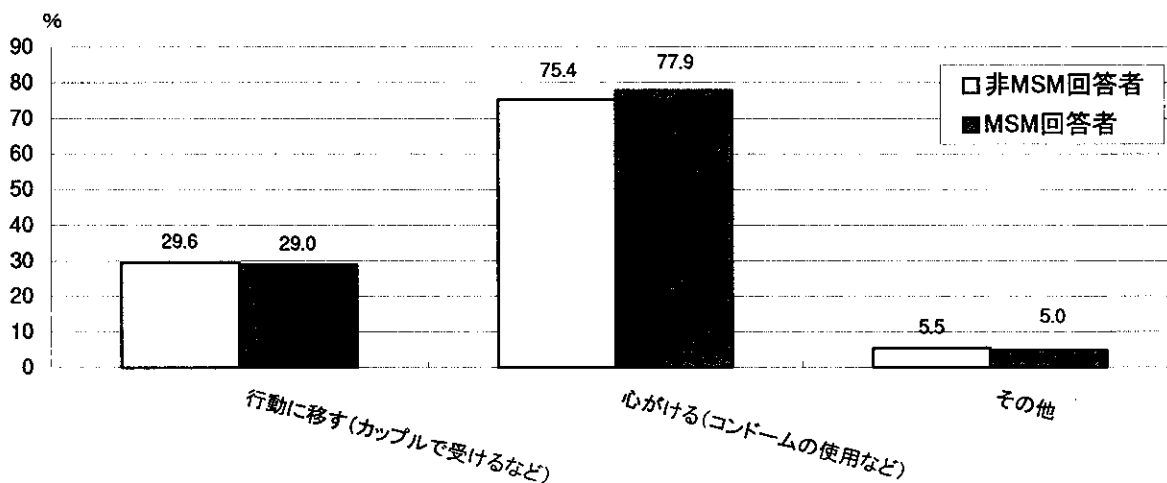


図6 「今後は感染しないように」



D. 考察

M医療検査機関の抗体検査数において、1998年はテレビのエイズ関連ドラマ放映の時期に一致して急激な増加がみられたが、その後も大きな検査数減少はみられず、1999年はさらに検査数が増加した。この検査数の増加は特にMSMと回答していない人の増加によるものであった。これは、ピルの解禁に伴いAIDSを含めた性感染症の話題がマスコミ等で取り上げられたことや輸血によるHIV感染の報道がされたこと等でAIDSに対する関心が高まったことが推測される。

また行政やNGOのインターネットホームページでM医療検査機関の情報を入手することが可能になったことも原因として考えられる。

MSM回答者と非MSM回答者における比較では、検査を知るきっかけとなった情報媒体に関する回答からMSMは「雑誌」「友人クチコミ」と限定されたコミュニケーション手段から情報を多く得ており、逆に「保健所」「(エイズ)対策室」に電話等で相談するという能動的アプローチを要する手段や、「TV・ラジオ」、「新聞」、「広報」等のマスコミを通じて広く一般に情報を流す

方法では、MSMには情報が届きにくいと考えられた。また、MSM回答者と非MSM回答者ともに、「マスコミ他」の自由記載欄に「インターネット」と回答した者が昨年調査と比較して目立っており、インターネットでAIDSに関する情報を能動的に入手していることがうかがわれた。また、受検者の約7割が都内在住であるが、職業背景から、M医療検査機関受検者の多くが都内在勤・在学者であろうと思われた。

既往検査回数では「初回受検者」「2回以上受検者」が共に増加していたが、「検査前における動機・不安等」について既往検査回数による差はみられず、いずれも「念のために受けた」と答えた者が最も多く、不安行動は少なかった。また、MSMでは感染機会から検査までの期間が短く、PR内容では恐怖を煽るPRではなく医学的なメリットのPRを望んでおり、これによりMSMがHIV感染への危険性について認識したうえ

で行動しており、受検者の多くが早期発見への高い意識をもっていることがうかがわれた。

検査後の行動では、行動変容の可能性を示す回答が多くみられ、検査後検査室を周囲に教えてあげることが「できる(したい)」という回答の多い結果を得ている。今回の集計より、MSM受検者はHIV感染に関する知識を持ちながら行動しているであろうことが明らかになった。しかし陰性告知後、行動変容できずに検査を繰り返している者に対しては、感染予防を確実に実行できるための情報や手段の提供が必要である。東京都では行政の協力のもとNGOが共同しMSM向け感染予防パンフレットを作成したが、今後有効な活用が期待される。また、情報が届かず検査に訪れないMSMに対してどう情報を伝えていくか、あるいは感染予防のための現実的な行動変容手段をさらに提案できるかが今後の課題であると思われる。

図7 「この検査について何でお知りになりましたか？」

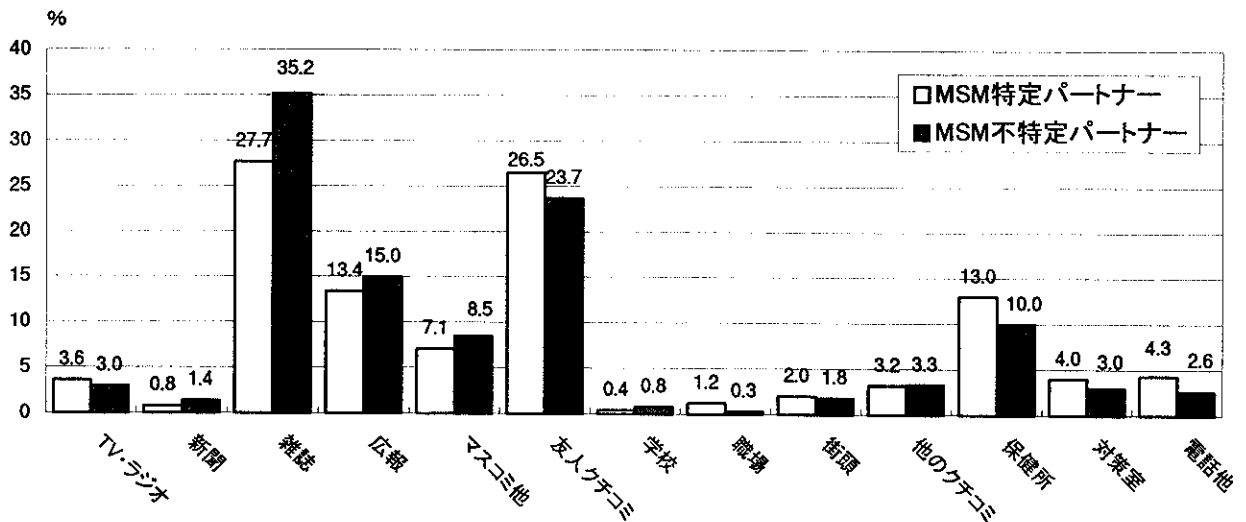


図8 「感染の機会や心配があったのは？」

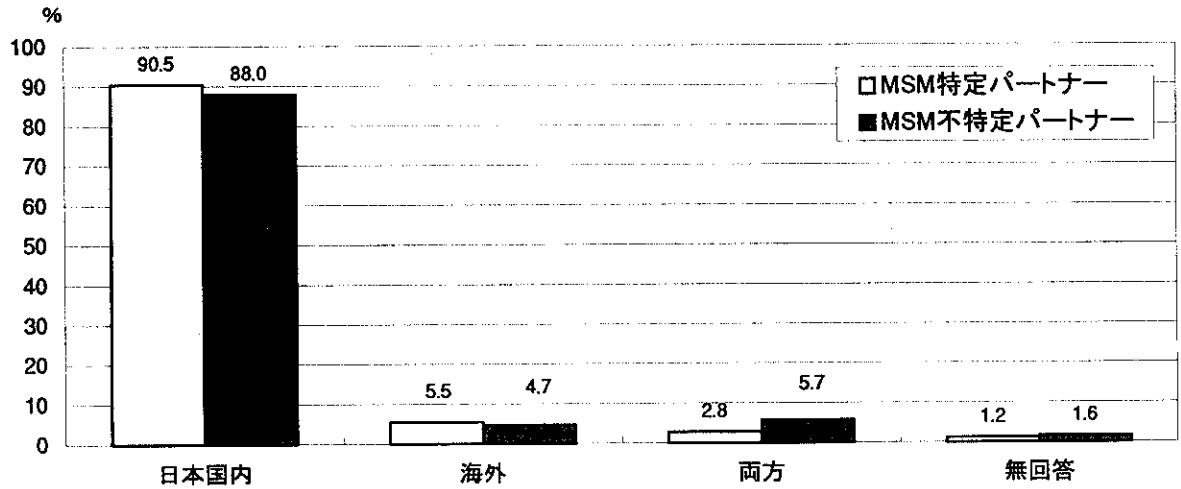


図9 「感染の機会や心配があつてからの期間は？」

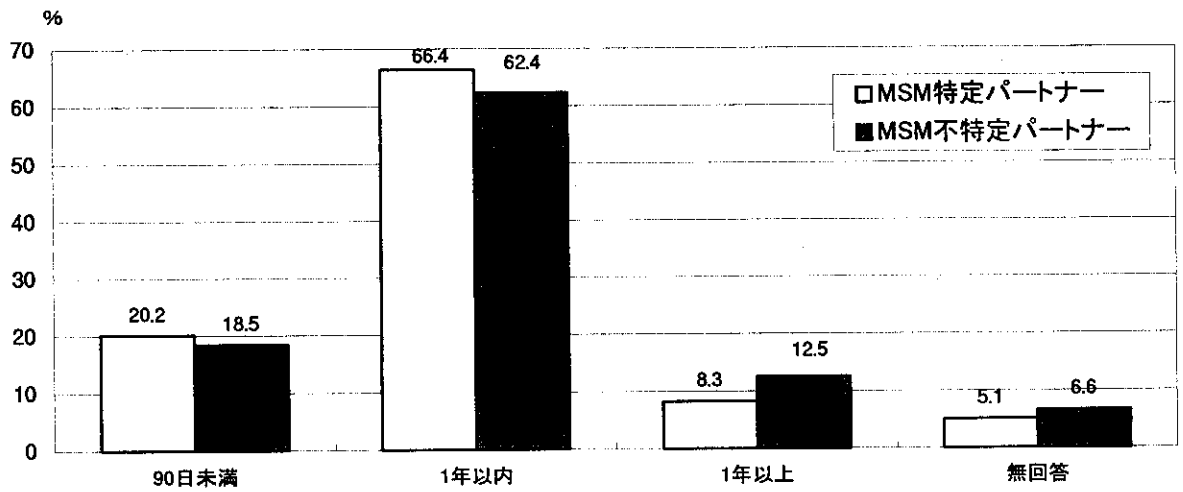


図10 「検査における動機・不安等について」

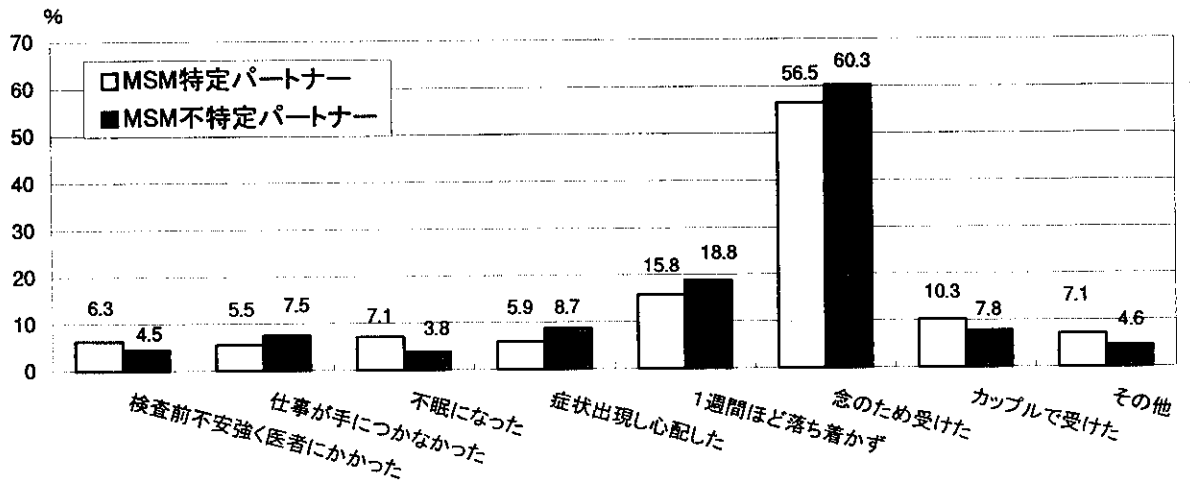


図11 「どの様なPRの内容が検査を受けようと思いますか？」

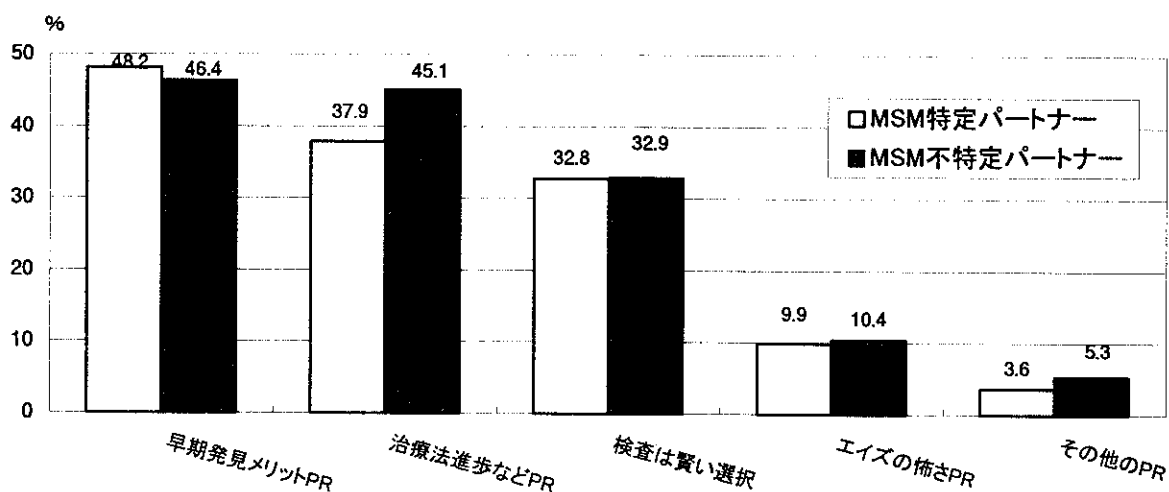
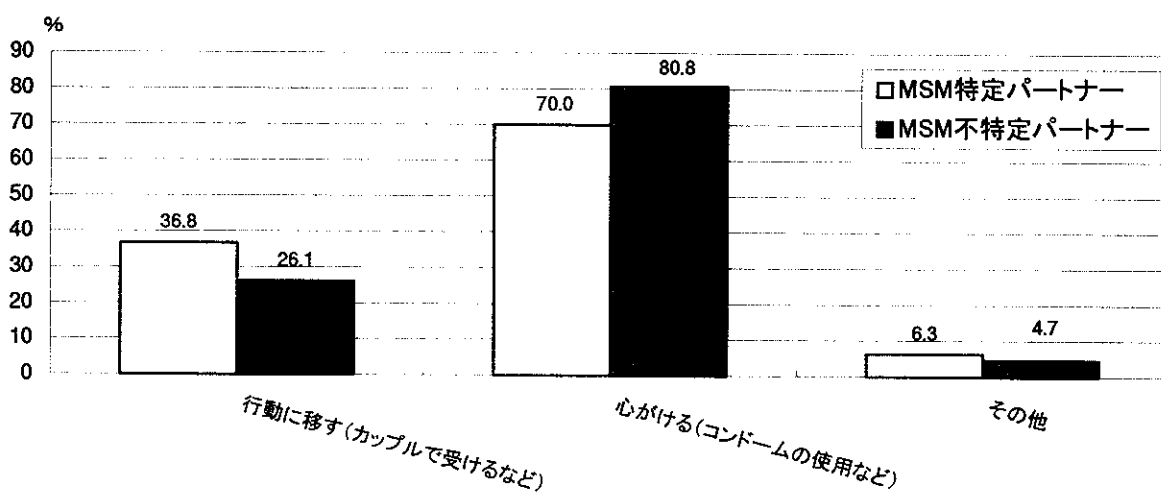


図12 「今後は感染しないように」



**男性と性行為を行う男性における
セイファーセックスの実行／非実行に影響を及ぼす要因に関する調査**

班 員：砂川秀樹（ふれいす東京／東京大学大学院）
生島 嗣（ふれいす東京）
市川誠一（神奈川県立衛生短期大学）
木原正博（神奈川県立がんセンター）

研究要旨

インターコースにおけるコンドーム使用の頻度について尋ねた質問を昨年度の調査と比較した結果では、「必ず使う」「たいてい使う」という回答が増加し、「あまり使わない」「全く使わない」という回答が減少している。しかし、一方、この一年間にコンドームを使わずに挿入した相手の数を尋ねた質問では、0人と回答した者は、挿入する側で半分弱、挿入される側で半分強に留まっており、多くの者がH I V感染リスクのある行動をとっていることがうかがえた。また、他の質問項目からは「良く知った」「特定の相手」との性行為においては予防しなくても良いという意識が根強いことが示されている。

インタビュー調査からも、「信頼／信用」のある関係においては、H I V感染予防策をとらないという傾向が見られた。また、インターコースにおけるタチ／ウケ役割遂行がセイファーセックス実行／非実行を左右する一つの関係性であることが浮かび上がっており、タチ遂行時のH I V予防の重要性を広く知らしめることが、タチーウケ関係においてH I V感染予防策がとられることにつながる可能性が示された。

A. 研究目的

平成9年度には、「ワークショップ分析」と質問紙を用いてセイファーセックスの疎外要因について調査・分析を行い、「力関係」「信頼感」という「相手との関係性」が、セイファーセックス実行の阻害要因になっていることや、「商業的ハッテン場」において行われる性行為の方が「ハッテン場以外」において行われる性行為よりもコンドームの使用率が更に低いことを明らかにした。また、その結果として、「不特定多数」との性行為が危険で、「特定」の相手との性行為が安全」とする「知識」が必ずしも正しいとは言えず、また、その根底にある「不特定」「特定」と

いう二項対立的な枠組みそのものが現実にはそぐわない可能性があることを指摘した。

平成10年度の調査では、前年度の調査結果から得られた示唆をより深く分析し明確化することを目的として、質問紙調査とともにインタビュー調査を実施した。その結果からは、前年度同様、特定／不特定の二項対立的枠組みがセイファーセックスの実行に影響していることが示されたが、インタビュー調査からは、さらにその二項対立の枠組みを個々人が様々に読み込んでいる様子がうかがえた。また、商業的ハッテン場でコンドームを使うことに対し、個々人は比較的良いイメージを持っているにもかかわらず、それが集団内で

規範として共有されていないことが明らかになり、今後の啓発活動へ重要な示唆を得た。

今年度の調査では、前年度使用した質問紙とほぼ同じ質問紙を用いて質問紙調査を実施し、過去2年間の調査結果と比較することで性行動の変化を考察する。また、昨年度のインタビュー調査手法の検討を踏まえ、自由面接に近い半構造化面接を採用したインタビュー調査を実施し、回答者の性経験に関する「語り」から、性行為そのものや性行為の行われる場や相手との関係をめぐる意味を分析する。

また、この3年間の調査結果をまとめ、今後の啓発活動のあり方についての提言を行う。

B. 研究方法

1. 質問紙調査

[調査の方法]

平成9年度、10年度と同様、質問紙をゲイ向けのパソコン通信会社の協力を得てネット上に掲示し、回答を募った。回答数は413件であり、システム上同一人物の重複回答はないものと思われる。

なお、この質問紙調査においては、調査協力依頼文の中で調査目的を明らかにし、調査結果が「厚生省 HIV 疫学研究班」を含む学会に発表されることをあらかじめ断っている。

[調査項目]

質問項目の概要は、大きく分けると、①属性、②性行動別のコンドーム使用状況、③この一年間のコンドームを使用せずにインターコースを行った相手の数、④HIVに関するリスク・アセスメント、⑤HIV抗体検査受検、⑥その他、となっている。

2. インタビュー調査

[インタビュー手法]

昨年度のインタビュー手法の検討を踏まえ、

なるべく回答者が自らの性経験やそれに対する意味づけを自由に語れるようなインタビュー形式をとり、回答者の話の流れをあまり妨げないようにする、自由面接に近い形の半構造化面接で行った。

いずれのインタビューも1時間前後行い、インタビューは本人の承諾を得た上でMD (Mini Disc) あるいはカセットテープに録音した。また、当然ではあるが、発表に関しても本人の承諾を得ている。

[回答者]

今回のインタビュー回答者のリクルートは、ゲイである筆者らの知人を通し行った。昨年度から今年度にかけての22人のインタビュー記録を今年度研究の分析対象とした。

3. 質的調査に関して

これまで日本のHIV疫学研究に関する分野において社会科学的な調査方法が導入されることは極めて少なく、質的調査に関しては皆無と言っても過言ではない状況にあった。しかし、「行為」という言葉が、「行動」を起こす者自らが意味を付与し、また「行動」を自己省察的に解釈するものだとするならば、まさに「性行為」はそのような意味を含んだ「行為」であることこそ重要な点があるのであって、その「行為性」を無視しては、HIV感染リスク「行動」が生起する背景を描き出すことや、そこに変化をもたらす働きかけを行うことは（その「働きかけ」を行う必要性や倫理性と影響についての考察も含め）不可能であろう。そして、その「行為性」へ注視するためには、分析者の概念枠組みや先入見のみによって現実が構成される、行動の計量化や質問紙調査などではなく、行為者自身の意味付けを読みとれるインタビューなどの質的調査を行うのが最も適切であることは

言うまでもない。そのような学問意識のもとに筆者（砂川）は、質的調査を積極的にこの場に導入している。しかし、ここで、数量的研究の意義を否定するつもりは毛頭ない（それゆえにここでも数量的研究も導入している）。それぞれに別の意味を担った研究方法としてとらえたい。

また、質的研究と呼ばれるものにも様々な立地点があるが、ここで筆者は、研究分析を、それぞれの「行為」の一回性や行為者の個別性へと還元する方向性はとらない。なぜなら、確かに行為者のそれぞれの「行為」は常に他の「行為」とは異なる一回性のものではあるが、行為者がその「行為」へ付与する意味は、常に様々な言説や表象という、社会的に流通している資源から引用／構成されているのであり（また、その資源により「行為」が触発されている可能性もあり）、その社会性は否定できないからである。また、筆者は、物理的環境が「行動」に影響を及ぼし、「行為」を変える（「行動」内容としても、付与する意味としても）ということも考慮すべきであると考えている。それゆえ、「普遍性」「一般性」という言葉を素朴に使うことはあえて避けるが、ある種のパターンを見い出していくことを、この質的研究の目的としている。

C. 研究結果

1. 質問紙調査

(1) 回答者の属性

年齢は、昨年は 25～29 歳が最も多かったが、今年は、30～34 歳が最も多く、35.8%となっている。次いで 25～29 歳が 27.0%（昨年度 35.6%：以下括弧内の数値は昨年度のもの）、35～39 歳が 22.3%（12.7%）となっており、25～39 歳が 85.1%を占める。この年代の上昇の理由の一つとして、この質問紙を掲示したパソコン通信サービスが会員制をと

っており、会員の出入りがあるとしても、継続して加入している一定数の会員の年齢が上がったせいが考えられる。居住地域に関しては、首都圏に住む者が 63.2%（65.1%）、その他の政令指定都市に住む者を合わせると 75.0%（78.6%）である。最終学歴は、大学・短大在学／卒業、大学院在学／卒業を合わせると 66.4%（65.3%）となる。

また、回答者の 97.1%（97.6%）が、セックスの対象を「男性のみ」あるいは「主に男性」と答えるとともに、性的指向の属性について尋ねられた設問では、86.5%（85.8%）の者が、選択肢の中から「同性愛者」を選択している。「両性愛者」を選択した者は 7.8%（8.7%）となっている。また、「わからない」「定義したくない」を選択した者は合わせて 5.1%（5.3%）である。男性との性行為の経験については、97.5%（98.0%）が「ある」と回答している。

(2) コンドーム使用の頻度

インターコースにおけるコンドーム使用の頻度について尋ねた質問を昨年度の調査結果と比較してみると、「必ず使う」（挿入する時：23.4%→30.4% 挿入される時：28.1%→33.6%）、「たいてい使う」（挿入する：30.8%→35.0% 挿入される：26.0%→29.8%）が昨年に比べ増加し、「あまり使わない」（挿入する：31.7%→27.1% 挿入される：31.3%→26.4%）、「全く使わない」（挿入する：14.1%→7.6% 挿入される：14.6%→7.6%）が減少している。

しかし、この一年間にコンドームを使わずに挿入した相手の数を尋ねた質問では、0人と回答した者は、挿入する側で半分弱、挿入される側で半分強に留まっており、多くの者がHIV感染リスクのある行動をとっていることをうかがい知ることができる。

また、実際の経験の有無に関係なく、様々な条件のもとにおけるインターコースについて「コンドームを使用するだろうと思う」ものを複数回答で選ぶ質問において、「ハッテン場で」(93.6%)、「「売り専」の人と」(90.2%)、「複数プレイで」(89.5%)、「知り合ったばかりの人と」(87.3%)等あらゆる項目で数値が上がっており、またこの上位4位の条件に関してはかなりの多くの者が予防意識を持っているのに対し、「長い間付き合い合っている恋人と」(21.6%)を選んだ人だけは5%減少しており、しかも他の選択肢と比較して著しく選択率が低い。これは、「良く知った」「特定の相手」との性行為においては予防しなくても良いという意識が根強いことを示していると言えるだろう。

ちなみに、先のコンドームなしのインターコースの相手の数を尋ねた質問において、コンドームの使用頻度において「必ず使う」と回答した者でも、1人、あるいはそれ以上の人数(とコンドームなしインターコースを行った)の回答を選択した者が、挿入する、されるどちらについても25%いることという点も注意すべきであろう。

これは、回答の信頼性の問題というよりも、「必ず使う」と言った場合の「必ず」という言葉へ解釈の差の問題ではないかと思われる。

2. インタビュー調査

(1)「信頼感」と「親密感」

過去2年間の調査では、「信頼感」や「親密感」、「力関係」がというセーフセックスの疎外要因として浮上してきたが、今回のインタビューからも、それらの感覚や関係性とアンセーフセックス(unsafe sex)との関係性を示唆する語りが聞かれている。

Jは、最近では、コンドームを使うようにな

ったと語りながらも彼氏とのセックスについては「彼氏とのセックスでは、コンドーム、いまだに使わないので。信用しているというか。」と述べている。

また、Hは、インターコース自体、あまり自ら好む行為ではなく、また中で射精されることに抵抗感があると言いつつも、相手への思いとの関係で次のように述べる。

「H：好きな人以外は、中出しはだめです。／インタビューア（以下イ）：逆に言えば、好きな人ならいい？／H：ええ、まあ。なんでしょうね。相手が好きだったら、そういうことを許せるんでしょうかね。」

Kは、ここ数年、インターコースにおいて必ずコンドームを使っているが、例外的に使わなかったケースである、久しぶりに会った昔の恋人とのセックスについて次のように語っている。

「イ：その時にゴムなしでしたというのは、どうして？／K：もうまたしばらく会えないから、お互いにこう、そのときすごく感じたいというか、あんまり何か足かせになるものがないような形でセックスしたいなと思って。」

また、「親密感」ゆえにコンドームを使わないということの逆の作用として、コンドームを使わないインターコースにより「親密感」が高まるという意識の存在が見られる。

G(24歳)は、インタビューアとのやりとりの中で以下のように語っている。

「G：そうだね。でも(コンドームを)使わないんなら長く付き合うけどね。／イ：ええっ？使わないなら？どういう意味かわからない。／G：うん。だってあれじゃない。コンドームを使わないということは、どっちかが病気を持っていればうつるわけじゃない？要するに命を奪うことになるわけだし

よう？だったら長く付き合ってもらわないと……。／イ：何？ それは、使わないなら、長く付き合えてこと？／G：そうそうそう。長く付き合うんだったら使うなという感じ。／イ：長く付き合うなら使うな……。／G：だからもともと、何？、学生で同棲して結婚しちゃう人とか、そんな感じ？ 長く付き合う人だったら……。／イ：ええ、じゃあ何？ じゃ、使わないことにも、肯定的な意味がある。／G：うん。使わないほうがやっぱりね、気持ちいいし、一体感というのがね、出るじゃない？」

このGの「語り」は、昨年度の調査でインタビューしたDの次のセリフにつながるものであろう。

「D：そういうこと（コンドームと使わないインターコース）を許すことによって、相手が自分に近いと感じれる。もしかしたら、そうかもしれないけど、もし、この人からうつされたとしても納得いく。リスクとりましょ、というのは、相手に対して自分の距離を縮めるということ。相手にもっと近くなれる。自分の中の親近感。」

このように「親密感」とセイファーセックスの実行／非実行、コンドームの使用の有無は、循環構造を見せつつ、強く関係している。しかし、この構造に対して、啓発活動がどう介入できるのか、難しい課題でもある。

(2) タチ／ネコ遂行

また、これまで指摘してこなかったことであるが、セイファーセックス実行／非実行を左右する一つの関係性が、インタビューから浮かび上がっている。

それは、タチ／ウケ (or ネコ) 遂行との関係である。タチとは、狭義には、インターコースの際の挿入者を指し、広義には性行為をリードする者を指す、ウケあるいはネコと

呼ばれるものはその逆である。ここで「遂行」とつけたのは、どちらかだけの行為のみしか経験したことがないという者は極めて少なく、どちらの行為を行うかということは固定的なものではないということが、砂川らの調査によって明らかになっているからである (砂川他 1997)。当然、同じ相手との行為の最中にタチ／ウケどちらも交代で行うこともある。よってここでは、タチ／ウケはその行為の度に、あるいは関係性の中で構成されるある種の「役割」であると考えたい。

ここでは、インターコースに注目するため、狭義の意味でタチ／ウケ遂行を考えたい。インタビューからは、明らかに、タチ遂行者のコンドーム使用に関する意思が実際のコンドーム使用の実現に大いに関係している様子がうかがえる。

タチの経験について語られる場合に、コンドーム使用の葛藤について触れられることはほとんどない。

Gは、ウケの時のコンドーム使用について（ここではハッテン場についての話の流れから）次のように語っている。（ハッテン場でのインターコースについての話から）「I：そういうときに、コンドームを使うとき、自分から言う方？ 相手が付けて……。／G：ああ、僕は相手に任せちゃうタイプ。／I：任せちゃう？ じゃ、もし使わなかったら、そのまま。／G：言えない。／I：言えない？／G：雰囲気壊すのが怖いから。うん。」

しかし、一方、タチを経験した時については次のように語っている。

「I：タチをしたことがある？／G：ある。／I：その時はコンドーム使った？／G：使った。／（中略）／I：何でつけようと思ったの？ その時に。／G：いや、目に入って、あるから、せつかくあるからつけようって。そういう何か、何気ない動機というか、そう

いう、うん。」

この同一人物の二つの立場に対する語りからは、ウケ遂行時とタチ遂行時の際のコンドーム使用に対する葛藤の差が明確に現れている。

また、タチしか経験のない者と、ネコしか経験のない者にも、明らかにコンドーム使用に関するコントロールの差が見られる。

しかし、一方で、タチがウケに比べ感染リスクが低いという意識を持つ者も多く、タチ遂行時におけるコンドーム使用の動機は低くなりがちである。

いかにタチ遂行時におけるコンドーム使用の動機を高めるかが、インターコースにおけるコンドーム使用を高めるための啓発活動の重要な課題と言えよう。

D. 考察

質問紙調査からは、全体としてインターコースにおけるコンドーム使用への意識が高まっている様子がうかがえるが、まだまだ使用率は低いと言わざるを得ない。また、質問紙調査からもインタビュー調査からも、パート

ナーなどの「信頼できる」「特定」との性行為においては予防しなくても良いという意識が根強いことが示されている。いまだに行政等が出すパンフレットなどには、「不特定」や「知らない相手」とのセックスが危険であり、「特定」や「よく知った相手」とのセックスが安全であるとするメッセージが流され続けられ、そのような世界観を強化していることもあり、なかなか新たな意識を生み出すことは難しくなっている。

また、タチ／ウケ遂行関係へ注目し、タチ遂行時のH I V予防の重要性を広く知らしめることは、タチーネコ関係においてH I V感染予防策がとられることにつながるとみられ、これからの男性同性間での性行為に関するH I V予防キャンペーンへすぐにでも活かすことができる知見と思われる。

E. 引用文献

砂川秀樹他, 1997, 「「ハッテン場」など日本のゲイをとりまく性的環境の調査, 分析 —アウトリーチ活動をアクション・リサーチの手法として—」, 財団法人日本性教育協会『日本=性研究会議会報』第9巻, 第1号

男性同性愛者におけるHIV/AIDSについての知識・性行動と 社会・文化的要因に関する研究

風間 孝、河口和也、菅原智雄（動くゲイとレズビアンの会）
市川誠一（神奈川県立衛生短大）、木原正博（神奈川県立がんセンター）

要約

ゲイ・コミュニティにおける HIV/AIDS についての知識・性行動・受検行動のベースライン調査および知識・性行動と社会・文化的要因との関連を明らかにすることを目的に、調査を実施した。対象は、動くゲイとレズビアンの会（アカー）が主催する AIDS 啓発イベント参加者、ゲイ・サークル参加者、STD 情報ライン相談者である。

（平成 9 年度調査）①性感染症に関する知識が十分に伝達されていない、②性的空間利用の有無によって HIV 感染の可能性の高い行為は見られない、③HIV 感染者と交流している者は感染リスク行為についてより正確な知識を持ち、より感染可能性の低い行為を行っている、④AIDS への関心の高さは知識の獲得や感染の可能性の低い性行為と関連がある、などがわかった。

（平成 10 年度）東京に加えて、AIDS 発生動向調査で第 2 位の神奈川県（横浜）も調査に加えた。また、新規の調査項目として、①HIV 検査の受検動向、②STD 感染の既往・知識等、③セルフエスティーム等を調査項目に加えた。HIV 検査の受検率は 43% で、うち検査時に不快・不安経験をした者が約 4 分の 1 であった。不快・不安経験としては、性的指向に関する医師・担当者の無理解等が目立った。

（平成 11 年度）前年度の啓発イベント開催地に千葉・埼玉を追加し、ゲイ・サークルへの調査も、東京で新規のサークルへの依頼の他、北海道・大阪でも調査を行った。また STD 啓発相談とアンケート調査を組み合わせ合わせた STD 情報ラインも新規に実施した。過去 3 年間では、STD 感染と HIV 感染の関連についての知識が浸透しつつあること、感染リスク行為についての認識が普及した反面、インターコース時のコンドームの使用割合はやや減少傾向が見られた。また、周囲のコンドーム使用の態度、およびセックスパートナーのコンドーム使用の態度や自己のコンドーム使用についての意志の表明が、インターコース時のコンドーム使用に有意に関連していることが明らかになった。

A 目的

本疫学調査は、ゲイ・コミュニティにおける HIV 感染症の影響について正確な情報を得るために NGO と研究者の共同によって始められたものである。この研究は、①男性同性愛者の HIV/AIDS についての知識・性行動・受検行動に関するベースライン調査の実施およびその推移の把握、②男性同性愛者を取りまく社会・文化的な背景と知識・性行動との関連を明らかにすること、を目的としている。またそのことによって、コミュニティにおける HIV 感染症の問題にどのように有効に介入できるかを構築することを目指している。なお、本年度終了後に、調査結果をゲイ・コミュニティに還元するための広報やイベントを開催する予定である。

表 1 第 1 期(3年間)における研究体系づくりの進行経過

平成9年度	平成10年度	平成11年度
①NGOと研究者の共同		
②アンケート協力者との関係づくり		
	③NGOの啓発事業への反映	
	④第1期としての調査方法の確立(表2参照)	
		⑤行政施策への具体的提言を視野に入れたアプローチの開発
		⑥ゲイ・コミュニティへの調査結果を還元する手法とその回路づくり

B 対象および方法

平成9年度は動くゲイとレズビアンのが東京で主催したAIDS予防啓発事業である「出会いイベント」の参加者、および動くゲイとレズビアンのがに連絡をとってきた個人および文化サークル参加者を含むサークル参加者を対象に調査を実施した。平成10年度は、「出会いイベント」を東京に加え、横浜でも開催した。平成11年度は、「出会いイベント」を船橋、大宮でも開催し、またサークル参加者に対しては、あらたに東京の3つのゲイサークル、北海道・大阪のゲイ・サークル参加者にも調査を実施した。また、11年度はSTD電話相談とアンケート調査をセットにした「STD情報ライン」にかけてきた人に短縮版の質問票調査を実施した(表2)。回収サンプル数及び回収率は、表3に示した。イベント参加者は272人(回収率80%)、サークル参加者は246人(回収率65.6%)、STD情報ライン相談者は191人(回収率34.9%)であった。

表2 調査についての進行経過

	平成9年度	平成10年度	平成11年度
*調査方法および媒体			
予防啓発イベント 東京(渋谷)	●	●	●
予防啓発イベント 神奈川(横浜)		●	●
予防啓発イベント 東京(新宿)			●
予防啓発イベント 千葉(船橋)			●
予防啓発イベント 埼玉(大宮)			●
男性同性愛者のサークル1(東京)	●	●	●
男性同性愛者のサークル2(東京)			●
男性同性愛者のサークル3(東京)			●
男性同性愛者のサークル4(東京)			●
男性同性愛者のサークル(北海道)			●
男性同性愛者のサークル(大阪)			●
*調査内容			
①HIV/AIDSについての知識	●	●	●
②過去1年間の性行動	●	●	●
③セルフエフティームとの関連		●	●
④STDに関する知識・行動・感染既往		●	●
⑤HIV抗体検査の動向・阻害要因		●	●
*電話サーベイ			
STD情報ライン		○	●

注) ●は実施を示し、○はパイロット事業の実施を示す

表3 サンプルの回収数

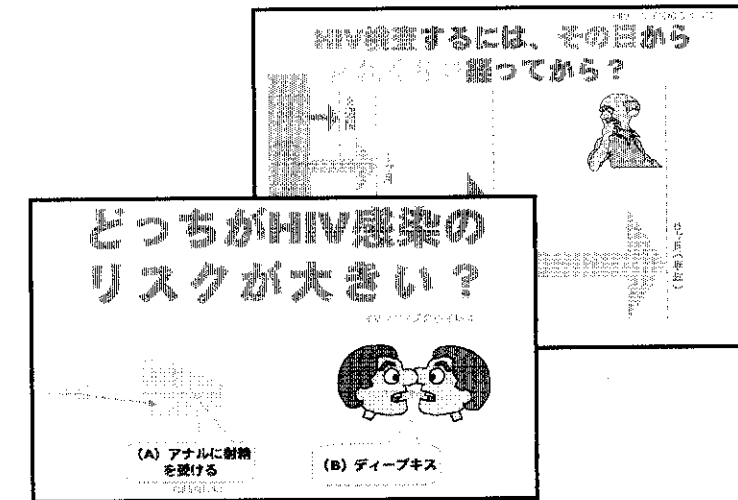
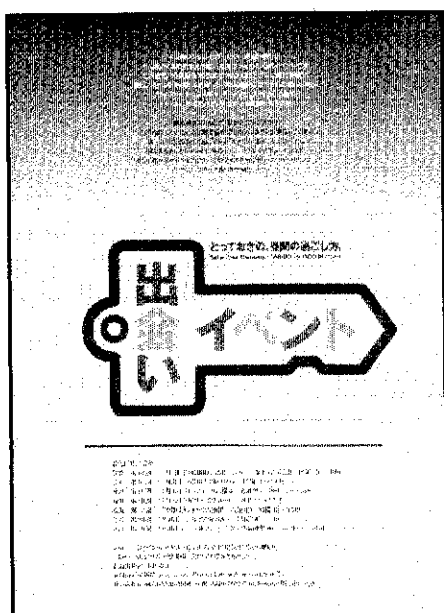
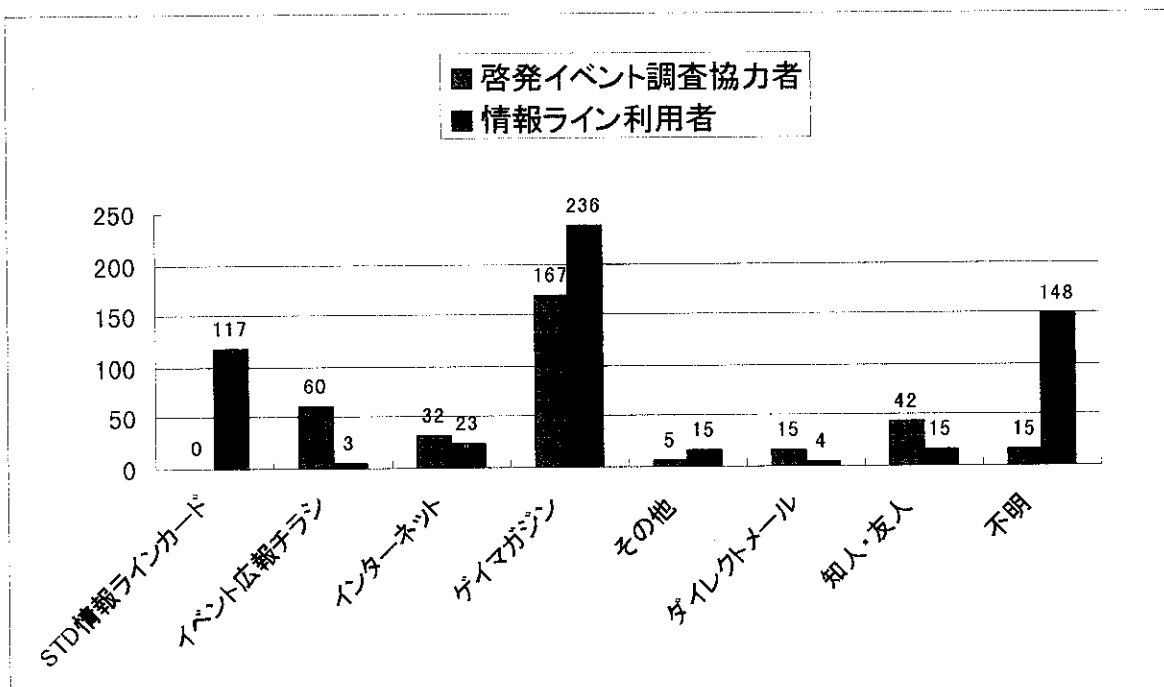
	イベント		サークル		STD情報ライン		計 n
	n	回収率(%)	n	回収率(%)	n	回収率(%)	
9年度	197(123)	95.6	65	68.4			272
10年度	182(122)	92.3	60	58.8			248
11年度	272(195)	80.0	246	65.6	191	34.9	709

*イベントの()内は、イベントへの初参加者を示す

表4 啓発介入プログラムへのアクセス媒体手法の内訳(MA)

	啓発イベント調査協力者		STD情報ライン利用者		備考
	n	%	n	%	
STD情報ラインカード	0	0.0	117(55)	21.4(28.5)	葉書大カード(3万部配布/全国)
イベント広報チラシ	60	17.9	3(0)	0.5(0.0)	A4三つ折(1.5万部配布/関東圏)
インターネット	32	9.5	23(9)	4.2(4.7)	男性同性愛の関連サイトに掲載
ゲイマガジン	167	49.7	236(106)	43.1(54.9)	広告掲載および紹介記事
その他	5	1.5	15(12)	2.7(6.2)	他団体、保健所、等
ダイレクトメール	15	4.5	4(0)	0.7(0.0)	イベント継続参加者への郵送通知
知人・友人	42	12.5	15(7)	2.7(3.6)	人づて、口コミ、等
不明	15	4.5	148(4)	27.0(2.1)	
計	272	100.0	548(191)	100.0	

*STD情報ライン利用者の()内は電話サーベイ協力者数を示す



(左) 予防啓発イベント「出会いイベント」広報用チラシ
A4一三つ折りサイズ

(上) イベント内で行う啓発クイズのパネルの一部(全21枚)

表5 H11年度啓発イベントの実施概要と質問票回収数

回数	日時	場所	参加者数	回収数	%
13回	11月7日	千葉県船橋市(勤労市民センター)	47	37	78.7
14回	11月23日	東京都渋谷区(BLOOM HALL)	71	48	67.6
15回	12月12日	神奈川県横浜市(フォーラム横浜)	28	25	89.3
16回	12月23日	東京都新宿区(トニーチホール)	62	55	88.7
17回	1月9日	神奈川県横浜市(フォーラム横浜)	25	25	100.0
18回	1月16日	東京都渋谷区(BLOOM HALL)	58	39	67.2
19回	1月30日	埼玉県大宮市(ソニックシティ)	49	43	87.8
合計			340	272	80.0

*参加者数はスタッフを除いた純参加者数である

表6 STD情報ライン（電話サーベイ）実施概要

対象/主旨	同性間性行為を行う男性を対象とし、電話による「調査」と「相談」を同時に行うもの
実施期間	1999年11月1日-2000年1月20日（日曜、祝日を除く）63日間
実施時間帯	12時-24時（12時間/1日）
相談件数	548件/756時間
調査協力者数	191人（34.9%）
プレ調査	1999年10年3月に実施（3時間×19日間=102件/57時間）
募集/広報	ゲイマガジン、インターネット、知人紹介、広報カード（ショップ、バー、サウナ、サークル）
調査内容	イベント、サークル調査の短縮版質問票を使用
相談所要時間	10-25分
調査所要時間	10-15分
電話の種類	フリーダイヤル（設定：携帯、PHS可/衛生電話、自動車電話不可） 番号：0120-783-083
コスト（電話料金）	（11月）87,528円、（12月）73,048円、（1月）62,485円、期間中合計：223,061円
開始準備作業	・STDクリニック医師によるスタッフ研修の協力/マニュアル作成（症状別および病名別） ・性的指向に理解のある紹介クリニックの開拓及びリストの作成
啓発手法の利点	・実施期間中、男性同性愛者向けの恒常的な情報提供窓口の役割を果たすことができる ・同性間の性行為によるSTD/HIVの予防情報を提供できる ・包茎やアナルの相談を含めることで、コミュニティへHIV予防情報を伝える接点広がる
調査手法の利点	・電話による調査は匿名で顔が見えないため、アクセス困難層からも協力が得られやすい ・回答者は質問票についての質問ができ、正確な回答が得られる ・「恒常的なサービス提供」を通して信頼関係が高まり、調査の還元方法も分かりやすい ・電話という手法により、特に情報のニーズ把握の側面を文脈に沿って収集できる
参考（前例）	オーストラリア/1992、1996/Male-Call

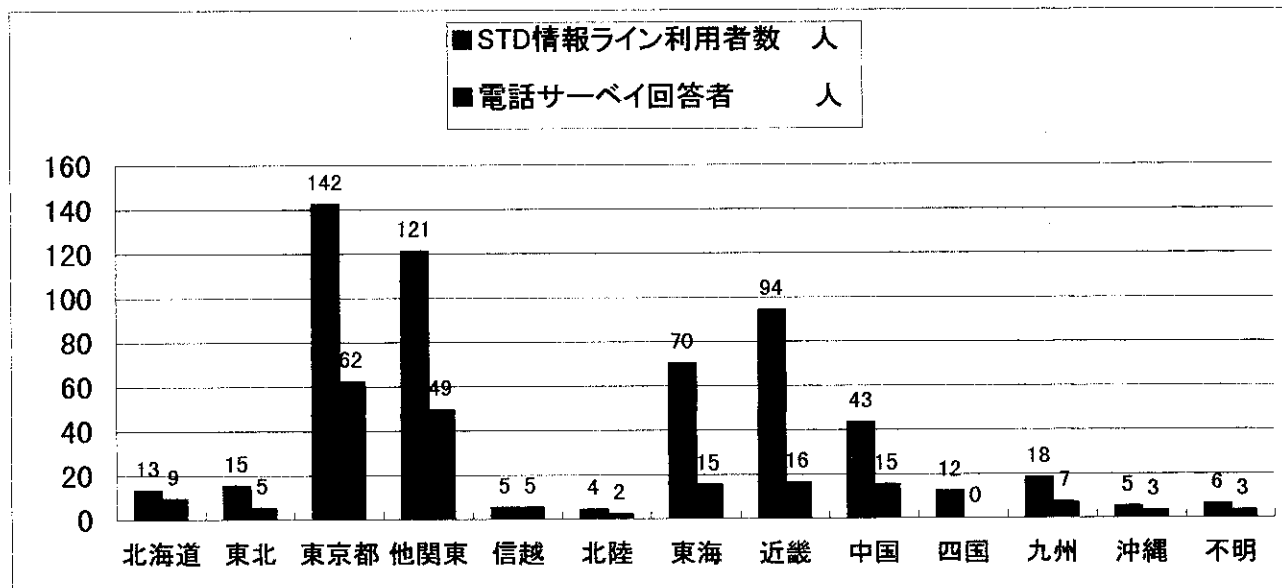


「STD情報ライン」
広報用カード（ハガキ大）

表7 STD情報ラインの利用者および電話サーベイ回答者の居住地域内訳

地域	北海道	東北	東京都	他関東	信越	北陸	東海	近畿	中国	四国	九州	沖縄	不明	合計
STD情報ライン利用者数	13	15	142	121	5	4	70	94	43	12	18	5	6	548
電話サーベイ回答者数	9	5	62	49	5	2	15	16	15	0	7	3	3	191
回収率 %	69.2	33.3	43.7	40.5	100.0	50.0	21.4	17.0	34.9	0.0	38.9	60.0	50.0	34.9

*他関東：東京を除く関東地区を示す



C 結果

(1) 属性 (11年度調査)

イベント参加者の平均年齢は28.3歳で、居住地域は関東地方が93.6%、過去1年間に性行為を経験した者のうち、その相手がすべて男性と答えた割合は92.6%であった。サークル参加者の平均年齢は28.9歳で、関東地方を居住地としている者は44.2%、性行為の相手がすべて男性と答えた者は97.6%であった。STD情報ライン相談者は、平均年齢が27.6歳、居住地域が関東地方である者が56.5%、性行為の相手がすべて男性と答えた者が59.8%、男性のほうが多いと答えた者が30.2%であった。以上から、現在HIV感染が増加している20歳代と回答者が重なっており、またイベント参加者は関東地方での男性同性愛者の動向を、サークル参加者は北海道・関東・関西地方のゲイ・サークル参加者の動向が示され、またSTD情報ライン相談者はほぼ全国から電話相談があったことから考えて、STDについて相談を抱える、あるいは関心がある者の全国的な傾向が示されていると考えられる。またSTD情報ライン相談者の1/3は男性・女性と性行為を行っていることも、その特性と言える(表7参照。なお、9年度、10年度調査の属性については、該当年度の報告書を参照のこと)。

(2) 3年間のイベント初参加者の知識、情報媒体、性行動の比較

以下、予防啓発「出会いイベント」参加者のうち、過去にイベントに参加経験のない「初参加者」の3年間の比較を行うことで、過去3年間のエイズについての知識、情報媒体、性行動の推移について検討を行う。

① 一般知識の正答率

10年度・11年度の両年度において、正答率が80%を下回ったのは、①HIV感染者は減少している、②HIV感染者は増加している、③HIV感染者は変化していない、④HIV感染者を刺した蚊や虫からHIVに感染する、⑤STDに感染するとHIVに感染しやすい、⑥STDに感染すると必ず発症する、の6項目であった。以上から、

HIVの感染状況、STDに関する知識、が十分でないことが示唆された。

他方で、⑤STDに感染するとHIVに感染しやすい、の項目に関しては、正答率が9年度の34.1%から11年度には57.9%まで正答率が上昇した。

以上からSTD感染とHIV感染の関連についての知識は他と比べて十分でないものの、浸透しつつあることが示唆された。

表8 一般知識の正答率（3年間の比較）

	9年度 (n=123)		10年度 (n=122)		11年度 (n=195)	
	n	%	n	%	n	%
HIV感染者数は減少している			92	75.4	153	78.5
HIV感染者数は増加している			93	76.2	155	79.5
HIV感染者数は変化していない			79	65.3	132	67.7
食器からHIVに感染する	103	83.7	110	90.2	165	84.6
プール・風呂でHIVに感染する			113	92.6	171	87.7
HIV感染者を刺した蚊や虫でHIV感染	80	65.0	87	71.3	131	67.2
トイレでHIVに感染する			114	93.4	169	86.7
出産でHIVに感染する	108	87.8	110	90.2	162	83.1
フェラチオでHIV感染する			101	84.2	154	79.0
フェラチオでSTD感染する			111	91.0	169	86.7
STDに感染するとHIVに感染しやすい	42	34.1	50	41.0	113	57.9
健康に見えてもHIV感染がある	106	86.2	115	94.3	173	88.7
STDに感染すると必ず発症する			87	71.3	120	61.5
コンドームでHIV感染を予防できる			115	94.3	162	83.1
コンドームでSTD感染を予防できる			109	90.1	156	80.0
感染後2-3日で感染してるかわかる	76	61.8	106	87.6	154	79.0
保健所で無料匿名でHIV検査できる	100	81.3	99	81.1	144	73.8
夜間休日にHIV検査できるところがある					132	67.7

②感染リスク行為についての認識

ディープキスで感染すると答えた者は、9年度・10年度ともにおよそ20%であったが、11年度は9.7%に減少した。また、口内射精でHIV感染すると答えた者は、9年度の80.5%から11年度は85.6%へと上昇した。また、肛門内射精では9年度の85.4%から11年度95.4%へ、コンドームなしのアナルインターコースでは9年度の58.5%から11年度の79%へと上昇した（表9参照）。以上から、感染リスク行為については、この3年間で知識が浸透していることが示唆された。

③情報を得る媒体（3年間）

エイズについての情報を得るための媒体として、この3年間で顕著に減少したのは、新聞・雑誌（9年度70.7%から11年度45.5%）、行政広報（同25.2%から9.6%）であった。反対に、顕著な増加を示したのは、ゲイ雑誌（同57.7%から71.1%）、パソコン（同6.5%から18.2%）であった。以上から、媒体としてはマスメディアおよび行政広報の割合が低下している一方、ゲイ・コミュニティ内の啓発が進捗していることが示唆された。

表9 感染リスク行為の認識

	9年度 (n=123)		10年度 (n=122)		11年度 (n=195)	
	n	%	n	%	n	%
軽いキス	3	2.4	1	0.8	5	2.6
ディープキス	24	19.5	29	23.2	19	9.7
口内射精	99	80.5	99	79.2	167	85.6
コンドームなしのフェラチオ	54	43.9	70	56.0	118	60.1
肛門内射精	105	85.4	104	83.2	186	95.4
コンドームなしアナル挿入	72	58.5	86	68.8	154	79.0

表10 情報を得る媒体

	9年度 (n=123)		10年度 (n=122)		11年度 (n=195)	
	n	%	n	%	n	%
新聞・雑誌	87	70.7	58	46.4	85	45.5
パンフレット	35	28.5				
ゲイ団体のパンフレット			27	21.6	48	25.7
行政や民間団体のパンフレット					31	16.6
テレビ	58	47.2	53	42.4	84	44.9
人づて	20	16.3	17	13.6	38	20.3
行政の広報	31	25.2	28	22.4	18	9.6
ゲイ雑誌	71	57.7	92	73.6	133	71.1
パソコン・インターネット	8	6.5	16	12.8	34	18.2
その他	7	5.7	10	8.0	13	7.0

④性行動 (2年間)

フェラチオ時のコンドームの使用割合は、特定パートナーの場合は変化が見られなかったが、その場限りのパートナーの場合は10年度の6.9%から11年度の12.1%へと上昇した。一方で、特定パートナーとのアナルインターコース時のコンドーム使用割合は40%から34.8%へと減少し、その場限りのパートナーとの使用割合も65.5%から57.5%へと減少した。他方、特定パートナーとその場限りのパートナーとでは、前者の方がコンドームの使用率が低かった。

以上から、その場限りのパートナーとのフェラチオ時のコンドーム使用率が上昇している一方で、インターコース時の使用割合が低下傾向にあることが示唆された。

表11 性行動

	9年度※ (n=123)		10年度 (n=122)		11年度 (n=195)	
	n	%	n	%	n	%
過去1年間のセックス	84	68.3	83	77.6	137	70.3
特定パートナーあり			35	42.2	62	45.3
フェラチオあり	70	82.9	31	88.6	56	90.3
コンドームあり	10	12.0	3	9.7	8	9.7
口内射精あり	9	14.7	9	29.0	14	25.0
アナルあり	35	37.6	15	42.9	23	37.1
コンドームあり	19	58.8	6	40.0	8	34.8
肛門内射精	4	11.8	4	26.7	7	30.4
その場限りのパートナーあり			70	84.3	100	73.0
フェラチオあり			58	82.9	91	91.0
コンドームあり			4	6.9	11	12.1
口内射精あり			6	10.3	11	12.1
アナルあり			29	41.4	40	40.0
コンドームあり			19	65.5	23	57.5
肛門内射精			4	13.8	4	10.0

※9年度は、特定/その場限りのパートナー別の性行動を開いていないため、参考として掲載

(3) イベント参加者・サークル参加者・STD相談者の3群間の比較

①一般知識の正答率

いずれの群においても正答率が80%を下回った項目としては、①HIV感染者の状況は変化なし、②HIV感染者を刺した蚊や虫からHIVに感染する、③フェラチオからHIVに感染する、④STDに感染しているとHIVに感染しやすい、⑤STDに感染すると必ず発症する、⑥保健所では無料匿名で抗体検査が受けられる、⑦夜間・休日検査にHIV検査ができるところがある、であった。以上から、HIVについての感染状況、オーラルセックスと